

■「愛生館」130年の歴史についてその理念一言で語るなら、『愛生済民』に他なりません。

創設者の高松保郎はその志半ばで明治26年に惜しくも病に倒れますが、愛生館二代目高松保と松本順大醫処方愛生館三十六方製剤により受け継がれます。

■その中、明治24年に愛生館北海道支部長として着任した秋山康之進もその普及を惜みず、独立後も愛生館の理念の下に至誠を尽し深い信頼を得てゆきます。

■北海道支部のみならず愛生館製剤三十六方は、創業から12年後の明治34年には、全国各地約800か所にも及ぶ拡がりを見せました。



(愛生館創業者) (陸軍軍医総監) (初代秋山康之進) (館主直筆)

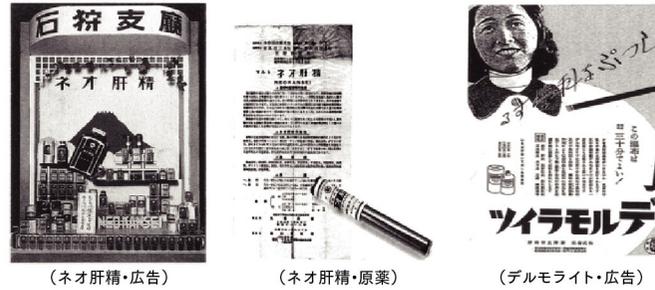
ここ札幌宮の森の愛生館文庫には、当時の歴史を物語る『社宝・大鏡』や、高松保郎絶筆の原著、『弘道済民陳啓書』(明治26年2月発行)も保管されています。

■二代目秋山康之進は販売網の確立を目指しました。昭和初期の不況を乗り切り経営を安定させるには自家製品の製造販売が要であると考えたのです。そこで生み出されたのが『ネオ肝精』と名付けた鱈の肝臓を原料とした栄養補助剤でした。



(社宝・大鏡) (芝田元達処方・活児) (弘道済民陳啓書(高松保郎絶筆))

■昭和7年、二代目康之進は地元北海道大学や臨床医科の協力等を得て『北海水産工業研究所』を設立。ネオ肝精の販売を始めるとたちまち主力商品となり、昭和14年に製造販売した粉末湿布剤『デルモライツ』は、特に病院の需要が急速に伸びていきました。



(ネオ肝精・広告) (ネオ肝精・原薬) (デルモライツ・広告)

■さらに、研究開発された坐薬『ロントナル』は国内外に拡がり、秋山愛生館の経営基盤の確立に、大きな力となりました。

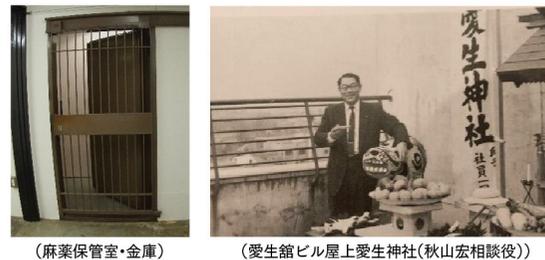
■二代目康之進の妻・秋山テツは、戦時中、夫の応召で不在の時期は、店の帳場管理や得意先とも夫の代役を努め、娘夫婦(後の三代目康之進社長・四代目秋山愛生館社長)と共に、秋山愛生館の経営を支えていくのです。



■終戦直後は経済混乱期にあり、工場確保や新製品の開発がままならない中、昭和23年3月に医薬品販売者協会が創設され、康之進は北海道地区を代表し同協会理事に就任。

■昭和23年11月、株式会社秋山愛生館を設立、初代社長に二代目秋山康之進が就任いたしました。

■株式会社設立5年後の昭和28年3月、秋山愛生館は麻薬元卸免許の認可を取得しました。南1条西5丁目愛生館ビル内には、現在も当時の『麻薬保管庫・金庫』が現存しています。



(麻薬保管室・金庫) (愛生館ビル屋上愛生神社(秋山宏相談役))

■三代目秋山康之進は、初代康之進が社是としていた愛生館精神『忍者身の宝也』(忍ぶる者は身の宝なり)の高揚に努め、地域医療の貢献と社会奉仕に力を傾けていきました。

■北大医学部薬学科の設置の募金活動に協力し、自らも『秋山奨学会』を設け、返済無用とし20年間継続されました。昭和28年には札幌ロータリークラブに入会し、奉仕活動や、38年には『小さな親切』運動の北海道推進協議会委員長に就任しました。

■そうした中、三代目康之進は昭和45年11月には札幌駐在スウェーデン名誉領事に選ばれ、47年開催の札幌冬季オリンピックでも歓迎行事を指揮するなど、両国の親善に尽力した労に対し、スウェーデン政府から北極星騎士賞の勲章と裕仁天皇名入りの賞状、社会貢献に対しては勲四等旭日小綬賞も贈られました。

■四代目愛生館社長・秋山喜代も夫が貫いた創業者精神を経営理念とし、人の命に関わる責任感と使命感を秋山愛生館社員への訓示として継承しました。

■また、当時は数少ない女性社長・秋山喜代を支えたのは、副社長の秋山宏でした。海軍兵学校卒業後、野田宏として『キスカ撤収作戦』、『レイテ沖海戦』等の通信長として、艦上で培った訓練や実践の場を通じ、バランス感覚の重要性を学んだといいます。編集長として社内報の創刊にもつながり、『愛輪は』社員の心のよりどころとして、最後まで長く愛されていくこととなります。

■創業100周年に向け、秋山喜代社長は私財を投じ生命科学の振興を祈願し、秋山財団を設立しました。

『北のいのちとともにー100年史ー』記念誌を刊行しました。それから1年後に社長から会長へ就任し、時代のバトンを渡しました。

■平成4年6月に就任した五代目愛生館社長・秋山孝二は、新しい価値観の創造を追求し、国際化への取り組みを実行いたしました。

就任後4年目の平成8年2月、(株)秋山愛生館は東京証券取引所市場第二部上場を果たしました。

そしてその翌日、秋山喜代は、それを見届ける様に逝きました。

■爾来、秋山喜代の遺した秋山財団も30周年を経ましたが、25周年の記念事業として愛生館文庫の創設を進めてまいり、令和の風に乗って『オープニングの幕』を開けることとなりました。



(三代目秋山康之進) (四代目秋山喜代)